



4428  
14



2/4



特 4428

例の  
木版

文

全  
十七  
編

□ 五反田驛の南側の降り口は、此處を張つて、  
 不乾青年の鷹の口豊吉は待機して居た。  
 □ 今日は何んか者が引掛るの。その何れもは  
 □ 興味ぶかい。  
 □ 夏又成つて、美少年も五人、女学  
 生を二人、それらも子あはれ一人、それだけ

一 白き  
つゝ  
常傲の

瀧の泡沫 (古洞)

文

40

白き水蔭

五月五日

昭和十年五月九日 購求





入を腰に掛て、何やら、  
けろ肩に掛けて、洋傘、  
目を輝かせる、五十、  
いっみの生かす、振り。

すう本気よ。 袖のて 来り

同いぬ。 如くし、  
車去の、  
海に掛けの、  
大増。

眉毛、  
こら、  
アケビの、  
間く

を、  
持、  
洋傘、  
間く

とグング

二、

振、

42

一色

不立止

まゝの御と

アケ

けり肩に掛けた洋傘無し  
日を露ける、五十ヶ  
ハッラの生糸を振る  
北月の高の  
誰かが披露の  
まへ

アケ本鏡  
初め  
来り

同いぬえ  
如く  
舞の  
と

海に掛けた大傘  
増

眉毛落して居る

この手はアケビの蔓の

持てる居るで、赤い洋傘を聞く

金箱

アケビの蔓  
とグング

目  
ふくて

二

振揃







6文

口 ぬ子街道の右へ入る所行く間には  
 順列の大分くづれて後の扉が先さるる成る告る  
 口 娘の左へはキガふぬか ~~道~~ で行く  
 何 ~~道~~ へ ~~倒~~ して居るものと氣も成るのを ~~道~~ には  
 口 ぬえ 奥田さん、妾、妾の様なわら  
 口 へえ、何故ですか  
 口 だつてさ、妾何んぞか夢をいいて  
 口 いてる ~~道~~ の  
 口 へえ 左様で……

二

口 ぬ子 ~~道~~ へ入る所行く間には  
 順列の大分くづれて後の扉が先さるる成る告る  
 口 娘の左へはキガふぬか ~~道~~ で行く  
 何 ~~道~~ へ ~~倒~~ して居るものと氣も成るのを ~~道~~ には  
 口 ぬえ 奥田さん、妾、妾の様なわら  
 口 へえ、何故ですか  
 口 だつてさ、妾何んぞか夢をいいて  
 口 いてる ~~道~~ の  
 口 へえ 左様で……











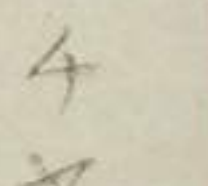


□ いん 娘は  
 □ 少年は一目惚れした  
 □ 俺の傍に居る事を先きへ替へて進んで居る  
 □ 何者か鷹には自分が立後子と見えて居る  
 □ 小娘のやびは笑聲が響いて居る  
 □ 曲漢も赤い髪をして居る  
 □ 遊を捨てて中形の浴衣を着て居る

112

□ 氷川の階は入口から一人下流へ  
 □ 感心して居るが、何處かへ行く所  
 □ 心持が、鷹の口は今、そんな  
 □ 無熱して居る熱し切つて居る。赤  
 □ 前二人は緑葉、トンネルを半を  
 □ 多怒木の木の後ろに隠れて居る  
 □ 蓮で体を巻いて、手拭で顔を覆り  
 □ 者が、女の眼を覗いて居る

□ 緑のトンネルを 実当ると、低い石段が有つて、その水を登ると 第二の石の馬場。け所、深きものは 珍しく、松の大本がある。そんなところ又右に曲つて、今度のは 可成り高い石段がある。其上は 氷川神  が鎮座する。きずりである。  
 □ ~~名代~~ 名代の 氷川の滝と、このは、最後の  高  
 いる段の石手、隈登の 釜系げ  下、洞窟が有つて、世の奥の 暗い 処で、湧いて流れる 清水を引いて、最袖の 低い石段の 右手に落して

と、銀杏返し。  
 □ 驚いたでせう。  おお、お  
 □ 驚きのあいな。  4ヤンと知つてたのよ。お  
 □ 出へ 馬場、おねと 娘は平氣を断つれ。  
 □ 相違も、お見かけは、お氣がえと 銀杏返し  
 □ は言つて、昔の歩き方、おね。  
 □ 何んが、話も、おいと、驚には、氣持の体。



ので、第一の倉谷の並木道を  
 一帯へは、片山の林原は、噴入つたけの  
 盆地が、恰度、旗を掲げれ  
 ます。

征つて、片山の立木を  
 日光を、を好い塩梅に  
 へまぐ、暑さ知らず。

け、所々、お手軽の茶舎が、出て、  
 けんのお茶を入れた、程、度で、客を  
 へて、居るが、言ふ、別、云地、ふの、氣は、道

□ 世所、二坪、は、り、掘、下、げて、石、疊、の  
 溜、壺、が、ある。古、く、か、と、見、え、る、石、垣、も  
 くづ、れ、掛、り、苔、も、能、く、附、き、上、り、は、本、の  
 枝、や、草、の、纏、が、西、徳、の、意、さ、つ、て、自、然、と、冷  
 氣、を、催、す、様、に、出、来、て、居、る。

□ 元、来、は、正、面、の、石、櫃、の、口、も、落、ち、一、竹、助、の  
 溜、子、作、ら、れ、居、る。横、手、の、又、一、本、  
 竹、で、呼、ん、で、居、る。

□ 片、溜、壺、の、上、は、一、寸、の、  
 地、は、成、つ、て、居、る。

□ 先無りの銀杏返しの他は、十三回の小娘  
 二人とは、小さく成つて銀杏の木の下は落縁  
 を敷いて待つて居るのだ。  
 □ 女所へ後の方へ同執。六人殖まれのものは  
 何れも成らぬ。  
 □ 兄兼て茶名のお婆が、汚いお水ですけ  
 れど上る手前の徑居が有りませうか、其  
 所を特別でお貸し申しませうと言出  
 したので、一同ホッと息の吐ける。  
 □ 忽ち石段を登つて残す上へ！

けず、朝の山并当を持つては、  
 此れなり、午睡をこもり、  
 一日掛り、夕方涼  
 しく成つての帰る。僅かの  
 茶代で結構ふの、  
 一家族を連れて来る。少ふく無い  
 □ 今日早人がある。茶名の方は一  
 杯ふりで、切石が置いてある上は、落縁を敷  
 いなり、山の本蔭に道を敷いたり、中  
 には、  
 押齋を矢敷く居る。



16文

女腹癒（ヨク）通信を（ヨク）  
 此の如く、首下成つれ、（ヨク）禮次  
 阿母が可憐か、居るのぞ、ふり  
 糸瓜（ヘチマ）を何ぞか、（ヨク）居る  
 赤心（アカココロ）垢摺り（カウズリ）は、（ヨク）居る  
 とすで、説明し、（ヨク）  
 後付（ウシヤリ）を、（ヨク）居る  
 誰の頭（カビ）も、（ヨク）居る  
 日へえ、では、（ヨク）居る  
 出あいてえ、（ヨク）居る  
 といふのが、（ヨク）居る

少年は  
 子役の  
 音聲雄

□ 疑問も諸方、（ヨク）居る  
 可、（ヨク）居る  
 心得、顔（カオ）を、（ヨク）居る  
 □ 古い、（ヨク）居る  
 主婦で、（ヨク）居る  
 □ 古いの本名、（ヨク）居る  
 踊（マユ）の師匠、（ヨク）居る  
 □ 大和歌の、（ヨク）居る  
 変（カ）あや、（ヨク）居る  
 曾て或る小劇場の、（ヨク）居る  
 居れば、（ヨク）居る  
 □ 古いの本名、（ヨク）居る  
 踊（マユ）の師匠、（ヨク）居る  
 □ 大和歌の、（ヨク）居る  
 変（カ）あや、（ヨク）居る  
 曾て或る小劇場の、（ヨク）居る  
 居れば、（ヨク）居る

# 17文

□ 鷹口は考へた。赤い小唄が茶を持つて来ぬのは幸ひである。今の間は陣地を奪へたけりには戦は出来ぬ。何所では全く地の理を待たない。  
 □ 上の家の周囲、世所を警戒しおけるは成るものと、目よをたぬ様は銀杏の下を去つて、石階を登つた。  
 □ 庭の音は遠く成るが、世代り山の本立は蟬の音が喧しい。  
 □ 赤い高い石階を登り、ゆふい間は頭の

□ 鷹口は考へた。赤い小唄が茶を持つて来ぬのは幸ひである。今の間は陣地を奪へたけりには戦は出来ぬ。何所では全く地の理を待たない。  
 □ 上の家の周囲、世所を警戒しおけるは成るものと、目よをたぬ様は銀杏の下を去つて、石階を登つた。  
 □ 庭の音は遠く成るが、世代り山の本立は蟬の音が喧しい。  
 □ 赤い高い石階を登り、ゆふい間は頭の

四





日 当所 名代の里芋を煮ころがして煮

ひきき。筍は中延、里芋は桐ヶ谷で煮る。

け所で煮る。筍は時候でせんが、

竹藪の中を掘って、根に附いて、新芽を取る

貫つて、竹藪の中へ炊込んで煮る。

急の間を合ひするめえと奥田は反身する

言ひ方。

日 へえ、お前さん、そんな通事も如何して

知つて居る？とお佐の声。

日 出番は、僕もツと世佐さまは知つてア

日 どうぞおめ。誰か聞きたてのあや

ぢやアおくとて！

日 實は電車の中で、そんな話を聞か

れ人が有つたのをね。

日 然るに。君の説では疑はし、か、人の

話を確かめよう。竹の芽めしは問合は

くつても、里芋は目の筋子有るんだが、掘を

てを直ぐ煮て貫つて、へこたぬア飲めるア

日 あ、おめさん、飯も事体有り者へて、

日 は、はッ、今がやアお前、出世するの、飲



ちよりの樂々々はあえのわらふよ。はこ

□このま冠せと小娘達のあはれ声。多摩野  
と女中とのいさかいの音。

□あゝあゝのシヤツが見えぬあゝの。浴衣が薄く  
なる。手拭のあはれを聞いて歸入りの  
身まなす、こゝろへしの様が思ふやうなる。

□襦の口はあゝの。眠いて、女中達の衣裾を脱  
ぐ娘のあはれが、聞新あはれに知らせ、それが  
あはれあはれ。

21. 21. 21

□今う、能へ行くぞと。けあはれはあはれ  
居る。着のあはれ考へて、けあはれのあはれを  
口は下へ降る。

五

□けあはれ、注意を、浴衣は、  
リノ圍るがせあはれ、中へは又板仕切で男  
女の區別が附けられぬ。甚だそれが、  
あはれ、風紀上の風紀仕方があはれ。  
□昔は併し、せんぶ物は無かつた。男と女

22文

一緒でつれ。

□ 道の縁で男女が打れ合つた。そのが又  
は道の真ん中で有つた。

□ 今では却て雨降る。けれども強い風の  
好きふ女は、つい左の方へ入り、傍へ顔を

向けて男は、右の方へ入る。あざむき。

□ 笠合つた時は、何方かへ、幾分でも空  
いた方へ入る。然るに融通は已むを得  
ない。

□ 雁には先替りして、男側へ入つて居る。

□ 溜り打れあつた。以所へ来ると寒い程

である。それを膝を組んで、踵を水の中

へ入つて、足跡を踏む。そして立つて

居る。

□ 少時して女側の方は、急な賑やかな成

つて居る。

□ 例の一行が来た。おれ。

□ まア可慕。本統は女側は好き


□ よよと江の流。

□ せんあま好きふのあま、体の心を

29文

打れて居るッ。原を付ま色。し〜とあふ。  
 冷〜れのは、お住り〜。  
 曰え、然〜するあ。  
 曰さ、あつき合はま〜は、おあふあしあ。  
 好い如減〜して置いてきま〜。  
 曰好い〜、一人、ボッち〜成〜、打れ  
 居〜。  
 曰然〜成〜、れ〜、け方〜行〜と、雁〜は  
 微〜を成〜。  
 曰ん、お危際、お奴〜機〜を見て居〜は  
 知〜。  
 知〜。

曰今の肉、ま、勢を洗ふ〜、午傳〜  
 曰え、廿〜を洗粉や石、礮〜持〜  
 来〜有りませよ。  
 曰ぶ、石、礮〜を〜、つ〜は、イ〜、あ〜、  
 してあ〜。  
 曰家〜、あ〜、ほ〜、せ〜。  
 曰おツ〜、  
 曰着〜、石、礮〜を〜、つ〜、それ、幸〜、  
 因縁  
 を附〜、書〜、待、措〜。  
 鷹〜。

□ このが 畫家か彫刻家かつかう、よいモデ  
 ルかと眼を細くする。地もよく考へられ。  
 □ 胸、打れて  水着が、ピッタリ肌を密  
 着して、乳の山が、ちっちり高く、それの女性  
 の特有のさみさみ、腰部の擴大して居る、そ  
 れが程合で居る。日本の舞姫と見ても  
 非難もあつた。西洋の女優のそれと比べ  
 て見て、耐て遜色が無い様だ。  
 □ 白張の暮れを、女海の方へ、顔はんで  
 見ようと思つた時は、既に先を越して、種音が

別て、秋江は  
 ヲリヤ入の  
 可樂殿より海水衣  
 も着て、海水靴まで  
 穿いて居る。

□ 後の、少女連も来れ。子供も来れ。  
 □ 息も水の打掛合せが始まつて、キヤツク  
 といふ聲。  
 □ 全体、どんぶ拾ねたわうと、鷹は板園の  
 の隙間にも覗いて居る。  
 □ 裸体は一人も居る。かつれ。  
 □ 皆海水浴です。様ふ物ねたを〜して居る。  
 □ 道理で色が考へつれと分つれ。  
 □ 鷹には甚だ詰る。あさ〜と顔をしめて  
 それで、赤い覗いて居る。







□ 飾り長く腐壺に居るのを、鷹の口は寒くツ  
 て、顔へる様々、成つた。これには夏が何ん  
 かの分りない程だ。  
 □ 彼方ではお相手が来つて、<sup>多</sup>あが彼の人  
 は、流つて居る。如く驚く程、海が好ま  
 だ。若くは体が不断、火の様、執つて  
 居る人だ。

□ けいちは、<sup>知</sup>知つたは、我儘として居るに、あいの

で、先きへ引上げん。

□ 拵敷の縁側へ腰を掛けて、日光と、

あけられ、追善の如く成つた。

□ 夏間、新江は上女中を連れてつて、あられ。


□ 然るに、あの濡れ衣、海水衣を脱いで、

浴衣と、着替へる時は、美し〜い体格が見

る。譯だ。自分だけ時、美術家がモデル

を相する。能く、その見たいものかと考

へん。

□  <sup>それ</sup>それは、何れも北側では、駭目だ。南方の如くで



あけられは成功しふいと見つれ。

□急いで其方へ廻つれ。けれど一軒家の直ぐ  
前へは流石と行き難い。餘りの開放的の  
畑地ふりて、身を寄せて隠れ見えた道員が無  
いかである。

□懐度畑の依路が十字形を成して居る  
よ、桃の木の影がある。其下の一丁影を依つて居  
るのを、其下より影には立寄つれ。  
□が大分離れて居るのゆゑ、懐い夏的光線  
が畑地をギラギラと照らす。其下へ

家の内部の薄暗さを眺むりながら、其が  
具合が要い。

□それより、畑の裏手に近く、  
先より餘程冷がらむて居る。

□でも、真白い雪より其が真白い、その  
光澤を持つて居る物、下の半部は燃え  
ぬき緋の色がめいれ。

□それが人であるか、何か、決して見究めの  
盡く程の距離ではあつれ。  
□それ切りして、後を見えよく成つれのは人



□ 息ち自分の目の前（葉が）に居込んで来た。驚いて見ると、赤蜻蛉が一ツ。  
 □ それを追いつけて、（赤蜻蛉）が走つて来た。只ツレ一人だ。

□ け時多摩雄を耳押へるのは、多摩雄が赤蜻蛉を捕へるより、（赤蜻蛉）の易さのであつた。  
 だが、鷹には、世方の氣は向かひあつた。

□ 餘り新うとけ新うとつて居るのを、折角觸れ冷えた体が、酷く熱くて、汗はダクダクと出て来た。眼が眩む様は、覺えとて来た。

□ それを鷹には、少時氣を控く事として、人の見たい本葉の繁りの中に入つて、横に居つて居た。

七

□ 目を覚まして見ると、蟬の音はあり高く、人の声は何処も仕ない。日暮い成りあつて、午睡は落ちる者が多いのだから。大間。和江の一行は、日暮の廣へで、（和江）はしあつたり

か、と心配こころをた急いそいで一軒家いっけんに近寄ちかつて

見れ。

□<sup>ん</sup>んが

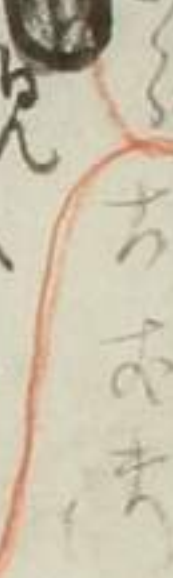


皆揃みなそろつて居た。

□<sup>ん</sup>んでは

午後ごごか。

□<sup>ん</sup>ん



鐘かねが集あつて

窓まどが覗のぞいて居た

居るのを見て晝ひるれと、簾すだには伸上のびあつた。

□<sup>ん</sup>ん五匹ごびきの油あぶらが盆ぼんに山やまに蹴くつて居るのよ、

鐘かねが重おもく集あつて居るの如ごとく見えれ。

□<sup>ん</sup>ん草くさの煮ゆれ、か破やぶれ、赤あかい少し残のこつ

詩うた

て居るのを見えれ。

□<sup>ん</sup>ん葉は酒さけの壺つぼ。倒たふれりや。折を詰りの海苔のり巻まき

の巻まき澤さわ山やまや。

□<sup>ん</sup>んそれか、け方かたよと、あう、覗のぞきしよと見えれ時

よ、ハタと圓扇えんせん書かきの音がして。

□<sup>ん</sup>んおア油あぶらアさんやと倉野くらのの音がしれ

のを、吃驚おどろき首くびを縮ちぢめれ。


□<sup>ん</sup>んおあさん、お妹いもうとの如ごとくおいと女おんな持もつ

声こゑがしれ。

□<sup>ん</sup>ん先まきか、俺おれ等はら斯ごとく皆みなふの由よし探たずねて。




曰 どうもね、葛ちゃんの様、人様、知れ  
 こまらぬね、困るでせうよ。それ、お禮にね。  
 あれ、水本のお娘がきて、直ぐ人にお見さんです  
 のね、始終、困る居あくツチやア成  
 らあしし……ら

曰 ねが、 け子は能くすけ所まで成  
 つれもんだ。お師匠さんの仕立も大体がやア  
 無のツれもね、当人の又、感心だ。  
 曰 ねえ、これで当時、踊りの名人で、大き  
 ぶ金の、お禮整でも、高貴方、知へであくツ

ちや行かふいてえ、おけんか 大人氣の花形とは、見  
 え 

曰 無邪氣なもんがやアねえか。え、如何に。  
 赤い子供ね。口を開いてお話、あんがア、  
 色氣が、無のツれもね、  
 曰 それです。お爺さん！

曰 声は、急、低く成つね。  
 曰 それが、です。ねえ、お爺さん！と、サ時直して

曰 ねえ、水本の家を  へ  
 へ、おけんか

男を知らずの昔のついでに成るやい  
んです。何時か子供で居る前が成るやい  
と云う事があるが成るやい。

酔く真面目に成つた。ヤアそれだ。その事だ。と倉野を

詰めて見ると、痛くは、少しづつ形が  
古層旧弊の様だ。あれで陰之態じ

くづれてはイケないのだ。手張亭を  
持たず、一生神心で暮らした方が、理原

は全つてのわね。昔から種々研究して見て、如何に

世所へ行くのふくつちア成るあんなに  
よ。難い。言ふと、技藝、神聖を  
保つては、生地で通さなければ、舞目さん

人間の体は血理をさせんた。だがよ、世代り又他の者は、今や

持つて、舞台へ立つた時、一番自分が  
偉いんが、あんなに

司 家の知つてる女の侍者さんで、今  
 は既う五十を越してゐるが、獨身で  
 通つて、立派な今日まで来た。て  
 さいすすび……年頃の時は、体の具合  
 で、何んとも云へない苦……が、肩が  
 張つて、張切ると、頭が……して、夢で  
 卒倒して……する事が、度々有る……で  
 さい。無理でも、かゝる……  
 司 ぢが、女子……と、其無理が通……  
 ……思ふ……が、全く傳へ……が、有る……が、  
 ……

又俺等の役目として、成るべくその  
 保護……し……あや……の……  
 小……俺との間……子供は……  
 何れ……世の中……之は……仕事……仕ね  
 えで、お前……俺……死んで……せめ  
 は、何ん……お前……を……  
 の……云……  
 色……の……  
 色……の……  
 色……の……





也 知る事は傍りなき事なり 其しは事なき事なり 其しは事なき事なり

可 妾も獨身で居りかつたぬ。おはこころ

□ 鷹には、これよりいへば、反抗心をもちて

去る。

□ 這んぶほい保護者の有る 龍江は幸

福ぶ女が。自分にはそれか一人も無かつ

た。

□ 自分を冷酷に取捨する者はありてあつた。

それで働いて、愛する方へ曲つてつたの

が。不良青年は俺が成つたのとはあかつ

大きい。

□ 鷹には、大松の根が、腰を掛けて、新澤本

を護り、其の、龍江の一挙一動

に注意し、

□ 先が長く、後ろに居るものが、非なる

時、其の、何と云へぬ風情をみる。

□ 抱ひと見える、羽二重地の、中形浴衣の下

の、緋締子の、腰巻が、4つ、する。

□ それが又誰かの、青博多の、腰巻を、無難

依、ブル、巻、して、素直に、其の、腰巻





可それ、後へ、多摩ちゃんかあてよ。

日あんて、油断さすも、いひここ。

○其の多摩ちゃんを、後へ、

ホント、突かぬて、一を、

て、行つて。

○轉んぬ、奥田は、額を、

日、あて、叫んで、追うて、

○今である！

○後の、突かぬて、突かぬ、

其折を、

いで、後の、草を、

へ、入れば、小笹が、

えぬ。

○其折、少し、

あつて、其折、

○然、

○とは、知らぬ、

髪、の、

先を、

間、

其折を、

○然、

○とは、知らぬ、

髪、の、

先を、

□ 難儀は無いのぞ。

□ 併し、とふ心が、ツツと眉間を刺す様。

成成りし事行はれん揚句は

□ ~~成りし事行はれん~~ 彼の女の誇りは全く失せられ

て、ふの地！

□ 今までの女は一人として誇りを持つては

居らなかつた。自分の勲徳は尊ぶと尊ぶは

ぬとは、別の關係の無いのばかりを有つた。


□ 龍江は就て先き話して居た古い夫婦

の言葉が耳に入らずに居る。何の躊躇

と出たおつたのね、……少し可笑き

だ。

□ そんな氣を鷹口は生じた。

□ 既に其時、龍江の姿が、の木

の下には見えなかつた。

□ 意地、彼女は神様か附いてゐるふと

氣を鷹口は持つた。

□ いや、彼の女、自らが神様ご有るのの様

に感して居るを来れ。

□ 龍江は、何千万人中、一人、に









思ゆつそ 血を吸けつて書らるか。  
 □ それも 線香を澤山立て、お通夜おとよの気分  
 で居て置らるか。  
 □ 兎も角 此所こゝで相今あいにまは成るなのは お急いそぎであ  
 る。  
 □ ほんまに死しで覚さめては いけさ。何処どこでも 耽たん  
 溺なしと 其その 敗類ばいれいの 気分きふんを 味あじわけるは 文士ぶんし  
 の 資格しきかくが 無い者もの——と云いつれ 様さま、なんぞ 沈し  
 黙もくさふ 心こゝろの 成なれさうが、今いまは 所ところを 思おもひを 春はる  
 ののは、甚はなはだ 愚おろかといふのは 思おもひを 所ところに 入いれ。

□ 里さと心こゝろが 附ついて 夢ゆめと、此所こゝの 甚はなだ 幾い干かん  
 心こゝろの 時呼ときよび 話わささかつか。それより 子こは 社しゃ  
 鈴すずの 一枚まいも 買かつて 遣やつた方が ちよと、ちよと  
 氣きが 出でて 夢ゆめとは 既すでに 往ゆく。 ~~~~~~~~~  
 □ 今いまは 富とみ森もりや 小倉こくら 氣き、 遠とほく 遠とほく  
 十徳じとく ぞ 着きる 線せんは 成なる 心こゝろと、 ~~~~~~~~~  
 は 自みづかしを 嘲あざわつた。  
 □ 赤あかむせ 所ところを 走はる 老おは 子こは 今いまも 成なる。  
 □ 興きよう味あじを 嘗あじふのは 昔むかしより 今いまも 成なる。いんか  
 と 如ごとく 一ひとつと 心こゝろを 開あけて 野のを 入いれ。

□ 治度 遠山が腰を掛けた居る空の境目  
 が遠山の三の米悟の縁をふりて居るの  
 有る。新鮮の空と、腐敗の空と、それ  
 入るの... 相搏して居る。そんな境目  
 を胸中に見て居る。  
 □ 電燈の光が眼眩しくして、ハッキリ眼を  
 開き得たいで、細い目が益々細い。其所は  
 雑ふい時の甘え、揉む情態が、あふとあふ  
 ぶろ路をたて、刹那の神の、女は可成り  
 揺れ、わりの、心は失せて、少女の雑然  
 又、護腕つた、其時、魚形を敷き  
 が認められ。  
 □ 貴郎、如何して？ 山で遠山は云つた。  
 上つた。  
 □ 他の三人は白河夜船。  
 向ふ...

□ 治度 遠山が腰を掛けた居る空の境目  
 が遠山の三の米悟の縁をふりて居るの  
 有る。新鮮の空と、腐敗の空と、それ  
 入るの... 相搏して居る。そんな境目  
 を胸中に見て居る。  
 □ 電燈の光が眼眩しくして、ハッキリ眼を  
 開き得たいで、細い目が益々細い。其所は  
 雑ふい時の甘え、揉む情態が、あふとあふ  
 ぶろ路をたて、刹那の神の、女は可成り  
 揺れ、わりの、心は失せて、少女の雑然  
 又、護腕つた、其時、魚形を敷き  
 が認められ。  
 □ 貴郎、如何して？ 山で遠山は云つた。  
 上つた。  
 □ 他の三人は白河夜船。  
 向ふ...









患者の病状が

干いて居る。客が一す葉を  
持たぬ時、引掛つる旅の人の  
先頭の老爺  
腕の無さ  
考へて見ると、どの位興  
味深い知識か。  
割増のあり、お半長右衛門、入間川、心中、  
んか、ほい悲喜劇か。ほんま風、遠く山は考  
へて。

文

52

可せめ、夜明けの、猛烈な、口々温の  
身の上話を、聴いて呉れ、聴いて上り下  
り、サア、三時、何時、サア、  
余は、早、サア、  
言、  
日、  
上、  
日、  
上、



文  
了

□ 外では 鶴が 鳴いて居る。内では 軒を 捲い  
て居る。  
□ お茶は 心得て 雨戸を 開けられ。

いけせんよ、六所は……居るぢやア有  
せん  
死んぢも 同然に 御座るんぢ  
聴くぢや 悪く 毒も 有るんぢ  
彼方と云ふ 何処へ……  
本家の 方よ、あぢぢい 能敷が 有りませ  
んぢ  
あぢぢい 何処へ……  
あぢぢい 何処へ……  
あぢぢい 何処へ……

十字品

□ 道の氣分は如何なるか  
○ 年は正に取合つる。

□ 何れやうで水車の音が響いて居る。その音がく  
く響くも聴き迷はせん。其他は如何なるか。入

□ 西側の人は夜に入つて急ぎに煙の掃き  
く成つて軒の垂下り地を掃く。掃

くを掃る。と見え。中へは  
唯黒い影ばかりで可なり。

柱の曲つて

壁が破れて雨戸が巧くは都合するの様な様子は  
で、それで煙燈の点けを待たぬのがある。隙間  
のツギでしるしの影が、大鏡が早つたの  
町並を眺むる。

□ 大分、赤い白んだら〜が、以所まである  
で、その町並を直ぐと河原

氣の着いた、大空の雨降るの、山、おま、  
見失ひさうだ。寄添へる片身、他は、  
は、是つと袖を縫ひ、下で、毎に、

支  
155

日 然...  
 日 風邪...  
 日 混...  
 □ お糸の身は...  
 □ 之は...  
 血を...  
 痛...  
 感...  
 相...

日 馬...  
 日 好...  
 日 好...  
 □ 何...  
 考...  
 可...  
 流...  
 日 寒...

□ お京は、現在の境況が何であるか、そんな事々全然忘れたる。十三四のぼんちの時代の運つて居る信ずる人の言ふが儘、如何なる命令でも服従する。然るに風を喜ぶ山は解離し

□ それで自分は如何なる。此方、青年の遊戯(初恋時代まで漸ぶた)其所を道楽し、熱い熱いといふと却とは然るは

□ これも昨夜の春(鳥)の頭脳は酷くいけなく成つて居る。新しい空気を呼吸して一時は片づいたが、此所を歩いて来ると、侍の急ぎで耐えられぬ。知るか、とお京は、正を軍に成る。とお京は問掛

□ 氣が着いて見ると、假構の上は立って居る。河原へ行つて、河原へ……と遠山は口がけ

景氣好く云つた。

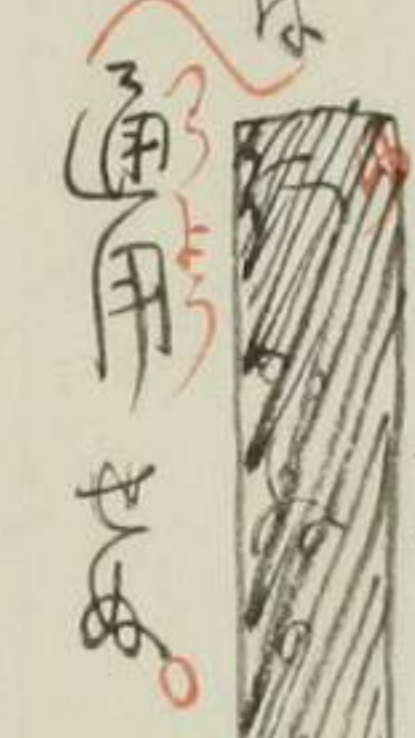
□ お京は、現在の境況が何であるか、そんな事々全然忘れたる。十三四のぼんちの時代の運つて居る信ずる人の言ふが儘、如何なる命令でも服従する。然るに風を喜ぶ山は解離し

□ それで自分は如何なる。此方、青年の遊戯(初恋時代まで漸ぶた)其所を道楽し、熱い熱いといふと却とは然るは

□ これも昨夜の春(鳥)の頭脳は酷くいけなく成つて居る。新しい空気を呼吸して一時は片づいたが、此所を歩いて来ると、侍の急ぎで耐えられぬ。知るか、とお京は、正を軍に成る。とお京は問掛

□ 氣が着いて見ると、假構の上は立って居る。河原へ行つて、河原へ……と遠山は口がけ

景氣好く云つた。



わ ちって、河原は…… 石ころぼろしです  
とおきは 詰るあや 相よ云つた。

石ころぼろしでとねいガヤアあいか

蹴足で止さヤアしすくし  
はあろあいで 詰す時をす

河原の石ころの上は 虫轉んを詰す  
事おでもあくらちヤア貴郎……

がアア 水の中は 詰る……

アア 泳ぐんです。

泳げ。程 深い処が有りは 仕るし

それ水は 深るんです  
世所の心中ごっ子が 二人の流るる

着た儘 水の中へ 体を浮かせて、首の上だけ

し、それを 詰すんだ  
然ですよ、そんな事お 詰るるんです

然るをすぬ 先程の 成さるんです  
んふ事や 根付あけは 成りせんか

アア 心付し…… 中し…… 好いぬ 入問三

57

文

その

58

ちあさいよ。け所は 拍原への 往來ですわ  
 …… 川下へ 行きませうよとお言は  
 云つね。  
 日 赤く 然るに 昏間 来れ 時々 見んが  
 日 鹿井 さん 川の中へ 掬ひ んで 置  
 日 粟らぬ  
 日 川竹 卯の 折曲つね 此へ 行つて 水  
 中へ 浸る 居れば 誰うと 見え せんあ  
 日 どの 道 赤く 夜が 明け ぬんが 人 見  
 れ け ぬ …… 世 方 へ 行 ぬ

日 け 期 子 はん で 摩 耶 心 かと 遊 ぶ は け  
 と 吹 け 見 ぬ  
 日 い こそ 覚 悟 は 疾 く 振 り て ませう …… お 待  
 日 け 期 子 はん で 摩 耶 心 かと 遊 ぶ は け  
 と 吹 け 見 ぬ  
 日 い こそ 覚 悟 は 疾 く 振 り て ませう …… お 待  
 日 け 期 子 はん で 摩 耶 心 かと 遊 ぶ は け  
 と 吹 け 見 ぬ  
 日 い こそ 覚 悟 は 疾 く 振 り て ませう …… お 待

十七

日 け 期 子 はん で 摩 耶 心 かと 遊 ぶ は け  
 と 吹 け 見 ぬ  
 日 い こそ 覚 悟 は 疾 く 振 り て ませう …… お 待  
 日 け 期 子 はん で 摩 耶 心 かと 遊 ぶ は け  
 と 吹 け 見 ぬ  
 日 い こそ 覚 悟 は 疾 く 振 り て ませう …… お 待

い

日 沖のぼ、小石の上ぢやア、そんな運びで行  
 日 小石の上を 下駄で 踏み下ろす音と 頼  
 日 魚の音と 川の音の中を 踏んで  
 日 小ア既う げんこで 踏んで  
 日 然して 山とお京の音と  
 日 サア一歩の音と 山と 踏んで  
 日 小の音と 山と 踏んで

□ 橋を渡ると 河原の小石を 踏んで  
 日 行く。 女歩き 難い  
 日 好い 加減の所で 心の中  
 日 え、……ですが、 然して  
 日 心の中 目覚めると 山の新  
 日 何う 歩き 難い  
 日 貴女、 本文 通じ 山と 喜を あんぶして 下  
 日 山と 喜を あんぶして 下

可 所で……ゆえ……  
 可 明けた……  
 可 だ……  
 可 おおが……  
 可 遠山は着れ儘で川の中へ……  
 可 おおの……  
 可 俺は……  
 可 附合……

可 本統……  
 可 善通の人は仕……  
 可 中へ……  
 可 俺は……  
 可 俺は……  
 可 俺は……



甘んじようくつ...

曰 ぢやアお待ちなすへ、まゝ本筋の覚悟を  
しよす...

曰 お止しな。話もさへきだ。にんじきを...

て附合すな。話もさへきだ。にんじきを...

曰 どうせ話もさへきだ。にんじきを...

しあつた。おつた。にんじきを...

曰 いや、俺は、これを話もさへきだ。にんじきを...

併し一人心中の成る。話もさへきだ。にんじきを...

は可哀さうだ。裸体で、話もさへきだ。にんじきを...

序下は、今朝、話もさへきだ。にんじきを...

曰 ぢやア貴殿は、話もさへきだ。にんじきを...

一ツたのをは、話もさへきだ。にんじきを...

曰 聴く気さ。水の中で、話もさへきだ。にんじきを...

曰 喜(喜)は、話もさへきだ。にんじきを...

川の中へ、話もさへきだ。にんじきを...

時を、話もさへきだ。にんじきを...

軽く

□ 仰あやむきよ成なりて今いまも後うしろの空そらを  
 の方がはた澄すみいて、侍さむらいも自然しぜんと後うしろの空そらを  
 そのまゝ留とどめて今いまの空そらに竹たけをたくしきて小こ石いし  
 が所ところの空そらに鐘かねが又またラ〜と〜と氣味きみが要いい  
 □ 好このいあゝあゝと〜と〜とお京きやうが言いつれ  
 □ 問まはさく水のみづの跡あとの喜よろこびが  
 □ 清きよい川がはあゝとと足あし踏ふむ氣きを流ながして捲めつて入いる  
 □ のと思おもつて遠とほくは氣きが〜と〜と  
 □ 何なにも川がはの上うへに流ながるを来きる。首くびの助すけも軽かろく  
 □ かく擡たつて蛇へびの骨ほねでと〜とと氣味きみが要いい

□ 肩かたの空そらは水みづは臨み切きつて流ながる。冷ひやめれすよ  
 □ 雲くもはす〜と、非ひ常じょう〜と〜と爽さわ快かいだ。  
 □ 雲くものせ〜と〜と河がはの〜とお京きやうは喜よろこびを  
 □ 傳つたへれ。  
 □ 寒さむいよ暑あついよ魚いの心こころは唯ただ心こころ持もたぬと  
 □ 喜よろこびは喜よろこべへ。  
 □ 今いまも本ほん結むすぶ貴あやむ即すなはち醉よめだすのよ  
 □ 今いまも〜と〜と云いつれと始はじまると〜と  
 □ ~~人~~人は然しかつと居ゐるよ。こゝろは水みづ  
 □ 中で冥みやう想じやうを耽たんが〜と〜と

能く見えぬ。白く見えぬ。河原の方へ  
濃く見えぬ。霧が掛かると見えなくなる。河原の方へ  
能く見えぬ。白く見えぬ。河原の方へ  
唯一人漂流

十八

朝の勤めの鐘の響き。荷車の音。次弟一夜が明けると。落しと見せぬ。おんちと持て

途惑つたかと思つた。お糸は一寸おの先も。で直ぐ又河原へ上つた。そのみでは無い。一人で先へ帰つた位と思つた。お糸は一寸おの先も。で直ぐ又河原へ上つた。そのみでは無い。一人で先へ帰つた位と思つた。お糸は一寸おの先も。で直ぐ又河原へ上つた。そのみでは無い。一人で先へ帰つた位と思つた。

水鏡氏小説挿巻茶中圖

して居る様ふ心もさへは成つる。  
 □ つい傍に女の首が落ちて居るものを見よ  
 しんのを吃驚せん。能く見れば、  
 れ。怒り有りたいと念どれば、舌張色の蒼  
 白いのが馬田留は結つて居る。おまま  
 のだ。□ びんをさすのは無心のと吃驚せん。  
 おい、おままさん、何せん？と喜ぶ  
 声を掛けが、居るはあつた。

か水子醉を隠し

65

二人川の中を顔を見合はせながら

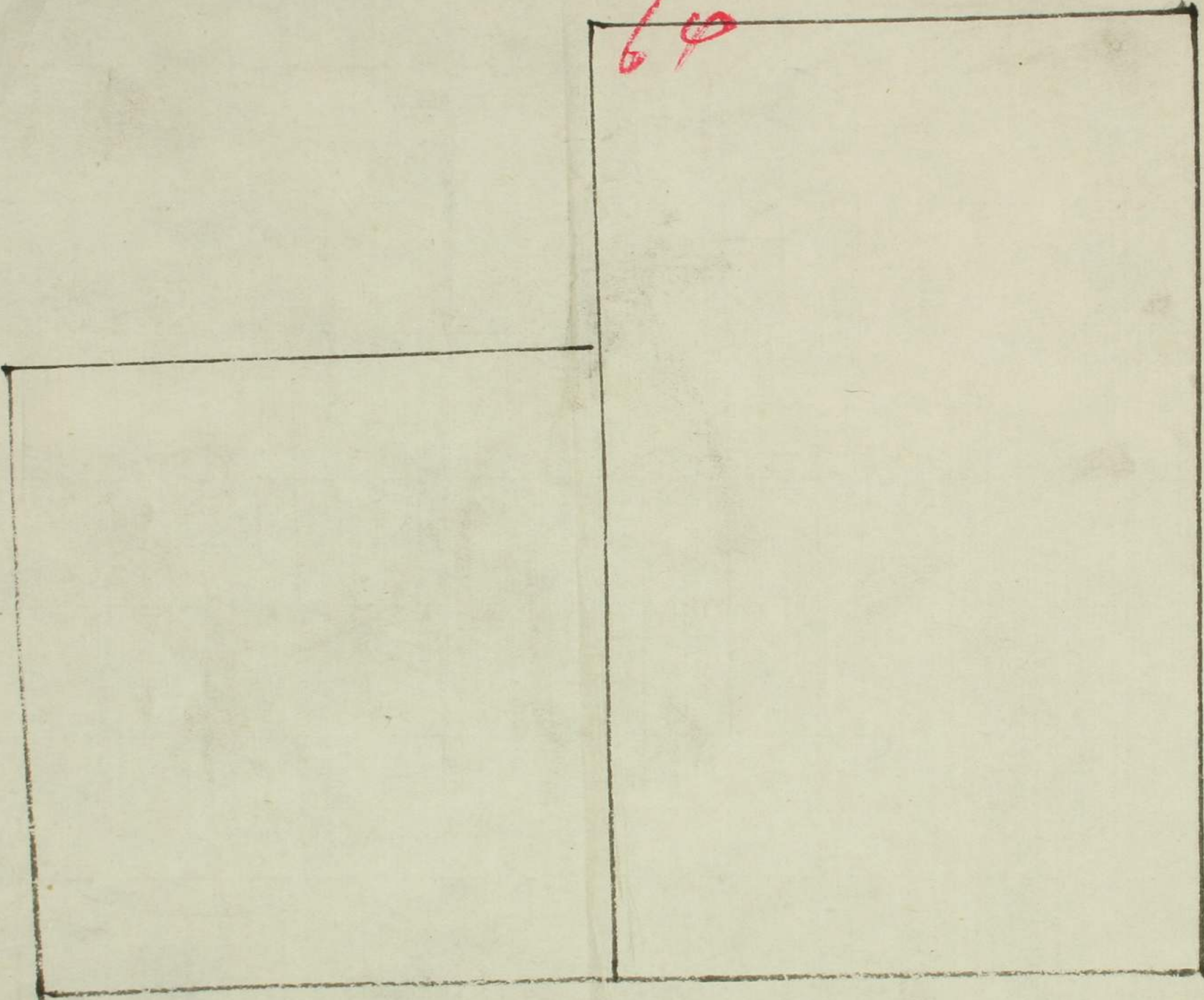
二人 川の中を 顔を見合せ  
 鼻の心ゆづる 涙かたれ  
 直水いね 何れは...  
 水入りまゝ 何れは...  
 何れは... 何れは...  
 何れは... 何れは...

してはる 心は...  
 ついで 隣の首が...  
 白い 髪田結...  
 声も 掛け...  
 おい おい...  
 声も 掛け...

水子 膝を 隠...

水鏡小説挿巻の巻頭

64



白いのが 田舎 結つて 居る。おま、  
 れ。おま、有り、れい、と、念、つ、れ、が、舌、張、色、の、蒼  
 白、い、の、が、田、舎、は、結、つ、て、居、る。お、ま、  
 の、だ、  
 □ 引、ん、で、る、の、で、お、ま、無、い、の、と、吃、驚、  
 日、お、い、お、ま、さん、何、に、れ、と、喜、  
 声、を、掛、け、な、さ、う、は、居、る、の、か、う、れ。  
 が、水、子、解、子、隠、



